旭川医科大学研究フォーラム10　：127～129，2009

学界の動向

第71回耳鼻咽喉科臨床学会報告

原　渕　保　明*

第71回耳鼻咽喉科臨床学会総会および学術講演会は、旭川医科大学耳鼻咽喉科･頭頸部外科学教室の担当で平成21年７月２日(木)、３日(金)の両日、旭川グランドホテルで行われました。本学会では「耳鼻咽喉科診療の向上と専門医の育成」をメインテーマとし、これから耳鼻咽喉科専門医を取得する若い先生方に耳鼻咽喉科診療におけるトピックスや、手術手技におけるコツなどが伝えられるように、臨床セミナー、手術ビデオセミナー、ランチョンセミナーを数多く企画しました。全参加者は767名でしたが、そのうち250名がこれから専門医を取得する耳鼻咽喉科医師、もしくは初期臨床研修医や医学生であり、本学会の特徴のひとつである「若手の研修・発表の場」を物語っていると思われました。

特別講演は「北海道」をテーマに２題が演じられました。ひとつは小松崎　篤先生（東京医科歯科大学名誉教授）の司会で、風景写真家の菊地晴夫氏による「北海道、そして美瑛の大地に魅せられて」でした。美しい美瑛の丘陵地を中心としたすばらしい動画と風景写真が最上級のPCプロジェクターによって映し出され、北海道の大自然の魅力を披露していただきました。加えて、年々その風景やそこに住む人々の暮らしが変化しており、その背景にある環境問題や離農問題などについても触れられておりました。このような問題は北海道のみならず、全国の地方がかかえる共通の問題とであることを痛感し、非常に示唆に富むご講演となりました。もうひとつは市川銀一郎先生（日本耳鼻咽喉科学会理事長）の司会で、旭川医科大学学長の吉田晃敏先生による「北から発信する地域医療革命」でした。旭川医科大学には日本で唯一の遠隔医療センターがあるように、地域の医療格差や医師不足を解消するための多くの取り組みが行われており、その内容と成果についてご講演いただきました。地域医療の問題は、北海道のみならず日本全体が抱える非常に大きな問題となっておりますが、これらの取り組みが広大な北海道全体をカバーしながら、医師の質的・量的不足を解決する足がかりとなり、その成果が現実のものとなりつつある過程を示されたご講演はまさに圧感でした。

シンポジウムは昨今いろいろな面で問題となっている「耳鼻咽喉科救急疾患への対応」をテーマとしました。山中　昇教授（和歌山県立医科大学）と川内秀之教授（島根大学）の司会で、隅上秀高先生（長崎大学）、片田彰博先生（旭川医科大学）、戸川彰久先生（和歌山県立医科大学）、片岡真吾先生（島根大学）、家根旦有先生（近畿大学奈良病院）の５名のシンポジストから、耳鼻咽喉科の様々な領域における救急疾患への対応に関する問題点を提起していただきました。加えて、それぞれの地方ではどのようなシステムで救急疾患へ対応しているのか、救急疾患に対応する現場の医師がどのような状況で仕事をしているのかについても言及していただきました。近年、耳鼻咽喉科を志す医師数は減少傾向にありますが、その結果が救急疾患に対応する勤務医のオーバーワークや医療事故と密接に関連している現状について、特別発言をいただいた日本耳鼻咽喉科学会理事長の市川銀一郎先生を交えて活発な討論がなされました。今回のシンポジウムが足がかりとなり、救急疾患への対応が抱える問題について多くの場で議論され、より良い方向に導かれれば、本シンポジウムを企画した者としてこの上ないことであると感じております。

*旭川医科大学　耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座

学会賞受賞記念講演では、伊藤壽一運営委員長（京都大学）の司会で、兵　行義先生（川崎医科大学）による「薬剤耐性菌に対するブロー液抗菌効果の基礎的検討」が演じられました。最近使用頻度が高くなりつつあるブロー液の持つ抗菌効果について詳細な基礎的検討がなされ、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌やメタロ-β-ラクタマーゼ産生緑膿菌に対してもブロー液が有効であることが示されました。また、ブロー液の耳毒性についても言及し、希釈したブロー液を用いても耐性菌に対する抗菌作用が十分あり、耳毒性の軽減にもつながることが示されました。

臨床セミナーと手術ビデオセミナーは、それぞれ6題、計12題のテーマについて御講演をいただきました。臨床セミナーでは、肥塚　泉先生（聖マリアンナ医科大学）による「“宇宙酔い”はめまい疾患か？－前庭関係の宇宙実験結果をいかに臨床応用するか－」、宇佐美真一先生（信州大学）による「遺伝性難聴の診断と取り扱い」、氷見徹夫先生（札幌医科大学）による「耳鼻咽喉科領域のIgG4関連疾患-Systemic IgG4-related plasmacytic syndrome: SIPS-」、北野博也先生（鳥取大学）による「甲状腺腫瘍の取り扱い」、吉崎智一先生（金沢大学）による「上咽頭癌の生物学的特性に基づいた診断と治療」、高原　幹先生（旭川医科大学）と赤木博文先生（南岡山医療センター）による「扁桃病巣疾患」が演じられました。日常診療でよく遭遇する疾患から最新のトピックスまで、それぞれの分野のエキスパートに非常に分かりやすく解説していただきました。いずれの講演も耳鼻咽喉科診療の向上に直結する内容で、有用な情報を提供できたと思っております。

手術ビデオセミナーでは、河田　了先生（大阪医科大学）による「耳下腺手術」、平野　滋先生（京都大学）による「ラリンゴマイクロサージャリー」、比野平恭之先生（高知大学）による「進展度分類に応じた真珠腫に対する鼓室形成術」、鴻　信義先生（東京慈恵会医科大学）による「内視鏡下鼻副鼻腔手術」、梅崎俊郎先生（九州大学）による「音声外科－甲状軟骨Ⅰ型のコツ－」、中溝宗永先生（日本医科大学）による「頸部郭清術」が演じられました。それぞれの領域で実際に術者として活躍中のトップランナーに、動画を用いて手術書を読むだけではなかなかわからない細かいコツ、加えて成功症例のみならず手術に難渋した症例のポイントを分かりやすく解説していただきました。いずれも頻度の高い一般的な手術ばかりであり、会場にはこれから手術手技を習得しようとしている若手の先生方が数多く参加され、立ち見の聴衆も見受けられておりました。

ランチョンセミナーも6題あり、感染症やアレルギー性疾患を中心に、林　達哉先生（旭川医科大学）による「難治性中耳炎の取り扱い－自信をもって診療するためのヒント－」、錫谷達夫先生（福島県立医科大学微生物学講座）による「先天性サイトメガロウイルス感染による聴覚障害」、松谷幸子先生（仙台赤十字病院と松根彰志先生（鹿児島大学）による「好酸球性炎症疾患」、保富宗城先生（和歌山県立医科大学）による「副鼻腔炎遷延化・難治化の要因」、白崎英明先生（札幌医科大学）による「鼻アレルギーの新療法」、宮崎修一先生（東邦大学微生物・感染症学講座）による「PK/PD理論に基づく抗菌薬の使い方」が演じられました。特に、微生物学や感染症学を専門とされる基礎医学の先生の講演は、基礎的な研究成果の提示にとどまることなく、その知見を臨床医学と結びつける内容となっており、耳鼻咽喉科医としても得るものが多い講演となっていたことに感謝申し上げます。

一般演題は例年通りビデオ演題とポスター演題で構成させていただきました。本学会が北海道で開催されるのは、平成3年に第53回を札幌医科大学が担当して以来2回目となりましたが、お陰様で一般演題の総数は328題となり、例年にも増して数多くの演題をいただきました。そのうちポスター演題は296題でした。今回、参加者の投票によるポスター賞が企画され、鈴木千晶先生（京都大学）の「内視鏡下鼻内手術後のガーゼタンポンは必要か？」、山口　恵先生（青梅市総合病院）の「クマ咬傷の1例」、古館佐起子先生（信州大学）「人工内耳埋め込みを行った無症候性先天性サイトメガロウイルス難聴児の2症例」、北川香里さん（三重大学）「スギ花粉症に対する皮下免疫療法の臨床効果とQOL」の4題が受賞されました。驚いたのは受賞者4名全員が女性であり、加えて、三重大学の北川さんは、まだ医学部6学年の学生であったことでした。ポスター発表では、全体を通して自由な雰囲気の中での活発な討論がなされおり、まさに本学会のねらいである「若手の研修・発表の場」となっていたと思われました。

今回の学会の運営は、会場の設営や映写機器の準備以外はすべて教室のスタッフが担当いたしましたが、なんとか無事成功裡に終了することができました。ご協力いただいた旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科同門会ならびに旭耳会の先生方に厚く御礼申し上げます。また、特別講演ならびに会長招宴でご挨拶をいただいた吉田学長、ご協力をいただいた本学関係者の皆様に心から感謝申し上げます。なお、旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室は平成22年７月に第７回国際扁桃・粘膜免疫シンポジウムを主催いたしますので、今後ともご支援の程、何卒よろしくお願い申し上げます。